

シュレディンガーの独我論的体験

渡辺恒夫 (Tsuneo WATANABE)

東邦大学

キーワード: シュレディンガー、独我論的体験、意識の超難問、心理-論理、自己の自明性、一者

筆者の個人的体験(文献1参照)を根源的認識動機とし、学生からの自発的報告(偶発的事例)を直接の研究動機として調査研究に携わってきたものに、意識の超難問(harder problem of consciousness)にかかわる体験と、独我論的体験(solipsistic experience)がある。研究の全体は文献2にまとめられているが、多数の収集された調査事例と偶発的事例をもってしても、これら二つの体験を統合的に理解するのは難しい。本発表では物理学者シュレディンガーの自伝(文献3)をテキストとし、両体験の連関を解明する。また、自己の自明性(self-evidentness of my “self”)という概念を精神医学の木村敏(文献4)から導入することによって、自伝に見られる世界観発展を、自明性の彼方における、独在する唯一者(the Only One)から遍在する一者(the One)への歩みとして解釈する。

意識の超難問:「なぜ私はこの人間であって他の人間ではないのか」というタイプの問い(超難問体験)。10~12歳が初発ピーク。哲学的には文献5参照。心理学的には自己の自明性の対自的側面である個別的自己同一性の自明性の亀裂、として定義される。

独我論的体験:「自分だけに意識があり、他人はすべてロボットではないのか」「自分以外の世界は作り物ではないのか」といった疑い。8~10歳が初発ピーク。学生からの偶発例を後に紹介する。心理学的には、自己の自明性の対他的側面である類的自己(self as a species being)の自明性の亀裂、として定義される。

方 法

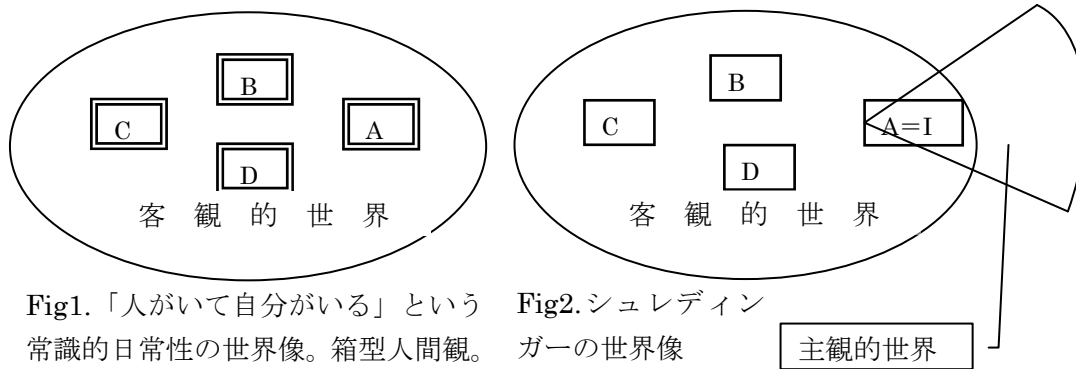
波動力学を発表する前年(38歳)に書かれた半自伝的著述「道を求めて」を一人称的に読み、他の事例と比較することによって、隠された心理-論理(psycho-logic)を明らかにする(本質直観のようなもの)。一人称的読み:テキストを、「私自身が体験し、記録し、どこかに仕舞い込んだまま忘れていた秘密のノートに再会した」ものとして読む読み方。

結 果 と 考 察

【比較事例】(20歳)昔思ったことのあることですが、多分心理学的な事だと思うので書かせて下さい。いつだったかは忘れましたが、本当に人が存在するのかという事です。自分は認識できるので存在はしているのですが、他人は外見しか見る事ができないのだから、自分と同じようなのか中身は空なのかわからなくなったのです。(……)人がいて自分がいるという考え方は、常識ですが誰も絶対に知ることはできないで納得してしまっている事です。今の自分も結局「納得」してしまっている訳ですが……というより、どんな答えをもってしても「理解」する事はできないので、「納得」するしかしかなかったのです。

【シュレディンガー事例-1】AとBという二つの肉体を想定するとしよう(Aが私の肉体とする)。Aは、たとえば庭園のような、ある特定の景観の見える外的状況におかれているとする。と同時にBは暗室

にいるとする。さてAが暗室に押し込められて、かわりにBが、Aのそれまでいた所と同じ状況へつれ出されたとしたら、庭園の景観は消えて真っ暗闇の世界になる（なぜなら、あくまでAが私の肉体であり、Bは誰か他人の肉体なのであるから）。――これは歴然とした矛盾である。というのは、一般的、総体的に考えてみた場合に、この現象には十分な根拠がないからである。（中略）そもそもすべての肉体の中で、そのうちの一つの肉体を、これら諸々の特性（＝私の肉体であるという特性）を総合することによって、他のすべての肉体からいかにして区別することができるのか。



2事例とも「人がいて自分がいる」類己の自明性が破れ、常識的日常性の世界が成立していない。比較事例では、日常性の世界を『納得』するしかしかなかったが、シュレディンガーでは Fig2 のような世界像が営まれ、「なぜ唯一つしかない主観的世界がAという類己的存在に一致するのか」という、意識の超難問が発生している。

【シュレディンガー事例-2】なぜ君は君の兄ではなく、君の兄は君ではなく、君は遠縁のいとこのうちの一人ではないのか。

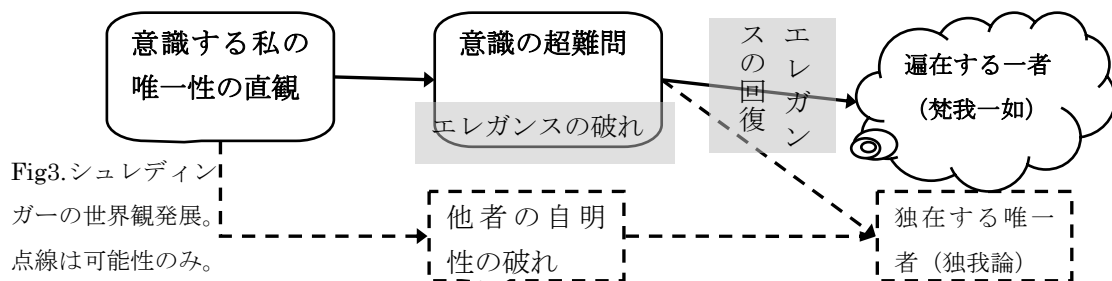


Fig. 3 は他の事例との比較によって解明された世界観発展である。意識する私の唯一性の直観は反復してテキストに現れるシュレディンガーの出発点である（別図参照）。点線はありえたかもしれない道筋。他者の自明性の破れについては、別図（独我論的体験の構造）参照。自明性の彼方の世界において、最終的にはインド哲学の梵我一如の世界観に達しているが、それは Fig2 の独我論的世界像がエレガントでないと感じられたからであると、その心理-論理を解明できる。

文 献

- 1 渡辺恒夫(1996) 輪廻転生を考える 講談社現代新書
- 2 渡辺恒夫(2002) <私の死>の謎――世界観の心理学で独我を超える. ナカニシヤ出版
- 3 シュレーディンガー(1987) 橋本芳契(監訳) わが世界観「自伝」 共立出版
- 4 木村敏 (1973) 異常の構造 講談社現代新書
- 5 三浦俊彦(2002) 意識の超難問の論理分析 科学哲学、35-2, 69-81.